

小学校国語教育の課題

— 学生の言語表現力から —

坂本 芳明

抄録: 今、「ゆとり教育」で育ってきた若い人の「言語表現力」の低下が問題となっている。本稿では、大学の授業から見えてくる学生の言語表現力の実態から、「文章表現力」と「コミュニケーション能力」に視点をあて、彼らが受けた小学校国語教育の課題を探った。その結果、生活の中で生きて働く基礎的な知識や技能が身に付いていないこと、目的意識や相手意識が弱いこと等が明らかになった。言語活動を促すのは、表現を迫られる必要性や強い表現意欲である。「言語表現力」は、伝えたいことを適切な方法で表現できたという成就感が伴ってこそ確かな力となる。したがって、これからの小学校国語教育に期待したいのは、生活や社会に生きる言語表現力を身に付けさせること、活発な言語活動が行われる主体的で創造的な学習を積み重ねること、以上の二点である。

はじめに

今日、国際化、情報化の社会にあって、「ゆとり教育」で育ってきた若い世代のコミュニケーション能力や文章表現力の不足が危惧されている^{注1)}。しかも、PISA 調査「読解力^{注2)}」の結果を受けて、書かれた情報を解釈し、考え評価する能力の低さが問題となり、学習指導要領の改訂では、各教科等の学習の基本となる国語の能力を育成することが、一層、重視されたのである¹⁾。

筆者は、まさに小学校の教育現場で「ゆとり世代」を育ててきた責任がある。彼らが学んできた学校教育の礎は小学校にある。学生の言語表現力のもとをたどれば、小学校の国語教育に行き当たるといってもいい。言語活動を促すのは、表現する必要性や強い表現意欲である。「文章表現力」と「コミュニケーション能力」は、「表したい、伝えたい」という強い思いを「適切な方法で表現できた」という成就感が伴ってこそ確かなものとなる。しかし、学生がこれまで学んできたであろう適切に表現する基礎的な技能や知識は脆弱であり、かつ、生活の中で十分に機能していないのではないか。何よりも「自分が誰に何を伝えたいか」という相手意識や目的意識が弱い。「私は、こう感じ、こう考えた。どう伝えたら、よく分かってもらえるだろう。問題点について、友だちと話し合い、さらに考えを深めよう。」という、主体的で探究的な学習の積み重ねが少なかったことにも一因があると思われる。そもそも彼らは日常生活で「書くこと」「話すこと」で悩む経験が乏しかったのかも知れない。そのため、彼らは、社会が抱くほど言語表現力についての危機感を深刻に実感していないように思う。

本稿では、大学の講義や演習から見えてくる学生の言語表現力の実態から、「文章表現力」と「コミュニケーション能力」に視点をあて、彼らが受けた小学校の国語教育の課題について少しく述べてみたい。

1 「国語力」の意味するもの

先に、「文章表現力」と「コミュニケーション能力」を合わせて「言語表現力」（もしくは「言語能力」）と、より理解しやすい言葉を用いた。教育用語としては、「理解力」と「表現力」を合わせて「国語力」という言葉が一般化している。これは、平成14年2月、文部科学大臣が文化審議会に「これからの時代に求められる国語力について」諮問したことによる。その意味合いは、「日本人は国語力、すなわち日本人として自分の母語である日本語の運用能力、日本国内に留まった国語力ではなく、世界の各国の人々と交流できる言葉の力（言語力）として日本語の能力を充実する必要がある。国際化、情報化の時代・社会に必要な言葉の力を身に付けることが急務である。」とあるように、言語の教育の立場を明確にし、言語能力の育成を目指すことにあった。

見落としてならないのは、審議会が「言語力」ではなく、「国語力」という言葉にこだわっている点である。言うまでもなく、私たちは母語である日本語で感じたことを表し、日本語で考える。微妙な感情のゆらぎを言葉にする時も、数学や科学で思考する時も日本語でこそ豊かで深いものとなる。

例をあげよう。日本に長く住んでいる12カ国語を話す数学者ピーター・フランクルが巧みな日本語での講演の中で、母国ハンガリー語に話がおよびハンガリー語で詩を朗読した。聴衆に感動が広がり、会場は水を打ったように静かになった。自分の心の奥深くにある微妙で繊細な表現は母語にはかなわない。翻訳では伝え切れない。彼は高度な数学の問題を解く時にはハンガリー語で考えるという²⁾。

母語の基礎を固めずして外国語の言語能力の向上はありえない。「何を、どのように伝えるか」という基礎的基本的な言語表現能力は、日本語であれ、外国語であれ、共通する。だから、OECDの学習到達度調査（PISA）も可能なのである。情報を処理し、伝達する言語能力の向上は、日本語、外国語を問わず、いくら強調されてもよい。しかし、それぞれの国の言語には、それぞれの国の文化が背景にある。国際化時代への対応を叫ぶ余り、性急に「日本語」を「英語」に置き換えてはいけないうのだろう。外国語を学ぶということは、その国の社会や文化を学ぶことでもある。しかも学んだことが、今を生きる私たちのものの見方や感じ方、考え方に反映してこそ学習の意味が出てくるのである。今回の指導要領の改訂で古典の指導が重視されたねらいはここにある。その意味で、言語能力の向上が現下の課題であるとしても、人間教育の基盤となる国語教育の担う範疇は深くて広いといえよう。

あえて横道にそれたのは、本学のこども発達学科の学生は、近い将来、子どもにかかわる仕事に就くからである。幼児や児童の感情の揺れ動きは我々の想像をはるかに超えている。そんな子どもに寄り添い、思いを受け止め、適切な言語表現へと導く責任がある。子どもの成長は、確かに豊かな言葉の獲得とともにある。まずもって、教育者自身が日本語に敏感であるよう努力し続けなければならない、そう思うからである。

2 学生は、国語の学習をどうとらえていたか

筆者が担当する「日本語表現」の授業では、幼児や児童の日本語表現について理解を深め、子どもの言語表現力をのばす保育士や教師のかかわり方を学ぶ。同時に、学生自身が相手や目的に応じて、日本語で適切に表現できることをねらいとする。学生の多くが自身の言語表現を省みて次のような感

想を寄せた。

「今まで、相手によって言い方や伝え方を変えたりすることを意識したことはなかった。どんな言葉を使うと自分の思っていることを相手に伝えられるか、自分の言葉に磨きをかけ、相手に応じたいいろいろな表現方法を学びたい。」

そもそも生まれて以来、自然に身に付けてきた日本語なのだから今さら勉強しなくてもよいというのが率直な思いといえよう。また、家庭や学校を中心とした狭い人間関係で過ごして来た彼らにとって、伝え方を変える必要はなかった。そのため、社会人として世に出た時に、多種多様な言語表現の場に対応しきれず、「今の若者は…」という非難を浴びることになるのだろう。本科の学生は、社会人として、幼児や児童とのコミュニケーション、同僚や保護者とのコミュニケーション、各種の記録や報告文を書くなど、正に言語表現力が否応なく試されるのである。

「国語科概論」の授業では、小学校の国語の学習にどんな印象をもっていたかを訊いてみた。「読む」「書く」「聞く・話す」「言語事項」「書写」の項目で好き嫌いを聞いて見たところ、図1のような結果になった。わずか64名を対象としたアンケートであり、おおよその傾向として参考になる程度であるがほぼ予想通りの結果であった。「好き」という割合が高いのは、理解領域としての「読む」ことである。「大好き」と「好き」を合わせると75%を超えている。国語の印象深い授業としてあげたのが、やはり文学教材であった。

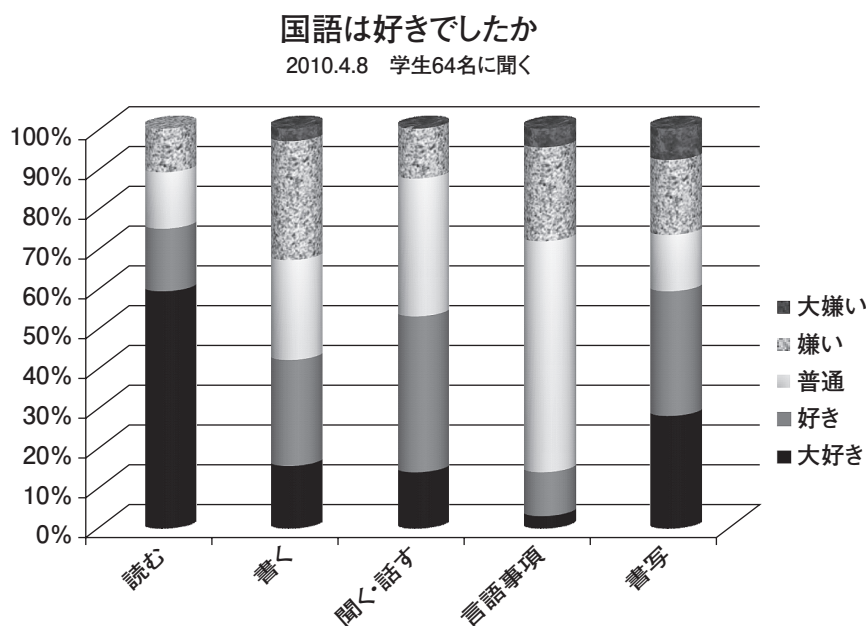


図1

時間をかけて読み取りをしたことや音読をしたこと、深い感動とともに今なお授業の風景がよみがえるようである。学生が小学生の時に使用した教科書を提示したところ文学教材についてはよく憶えていた。

一方で、「読む」こととは対照的に、言語表現として「書く」という学習の印象は薄い。「大嫌い」と「嫌い」を合わせると実に40%を超えている^{注3)}。詩から意見文、実用的文章と多岐にわたり指導時数は多いはずなのに、いわゆる行事作文を書かされたという思いが今でも強く残っているようである。これについては、「言語表現力」で後述したい。

また、「コミュニケーション能力」を培う「聞く・話す」について学習した実感はほとんどなく、

高学年のディベートが楽しかったという学生が数名程度であった。ディベートは学生が小学生の頃に始まったものであり、いわば正解のない問題について論拠をもとに討論する学習である。これらの問題点は、「コミュニケーション能力」の項で述べてみたい。

さらに、国語の学習で君たちは何を学んだのかと問うと、その答えは曖昧となる。「すらすらと本を読めること、登場人物の気持ちを考えること、字を上手に書けること、漢字を覚えること…」それが小学校の学習だと疑わなかったようである。

「国語科教育」では、教科として指導すべき「国語の力」を系統的、構造的におさえている。その基準が学習指導要領であり、国語の教科書は、それらを骨格として教材を編纂したものだ。国語科の授業で「読めること、書けること、聞き・話せること」が学年相応に行われるだけでなく、他教科の学習や生活の中で活用できてこそ本物の国語の力となる。小学校では、意図的に「国語科」と他教科や生活と結びつける指導が必須だ。生活場面で、活用できる力、これは、PISA 型学力でもある。

実生活において、「言葉の使い方を知らない若者」「蔓延するマニュアル言葉」「自分の言葉で語れない」「文章の体裁がなっていない」など、これらは、国語科教育で学んだことが実際場面で活用できる力となっていないことを意味している。学生が国語の学習のねらいを授業場面での読み書き程度にししかとらえていなかった責任は、国語教育を担ってきた私たちにあるといえよう。

筆者が論文のタイトルを「国語科教育の課題」ではなく「国語教育の課題」としたのは、「国語科」で学んだことが確実に生活で生きて働くような「国語教育」はどうあればよいかを問うためである。また、学生に、国語科概論で小学校指導要領と中学校指導要領を比較させたところ、目標や指導事項の根幹は変わらないことに目を疑っていた。言語能力の基礎基本は小学校六年間の国語科教育にあることを改めて確認できた。筆者が小学校の国語科教育にこだわる理由がここにある。

3 「文章表現力」向上のために

3.1 学生の文章表現力の実態

学生には、毎時間、授業の振り返りを 200 字程度の文章にまとめさせ、書き表し方の指導を重ねた。明らかに小学校で身に付けてほしかった基礎的なこととして次のようなことがあげられる。

① 語句の重複

「～について思ったことは、…と思いました。」

言葉の重なりが意外に多かった。一文が長い。読み直す習慣が身に付いていない。

② 話し言葉の使用

「言いたいことがいっきにどばっと思いついてしまって…」

話し言葉と書き言葉を使い分ける意識が薄い。

③ 連綿と続く文

「学力低下や教育力低下と言われつつも国際化と言われる今、幼児や児童の教育のありかたは特に重要だと思うので教育する側を目指す身として、その教育のありかたの変化に敏感になれるように、これから新聞を読んだり、ニュースを見たりとアンテナをはっていきたい。」

一文が長く、しかも、次から次と書くことがそのまま続くため文意が通らない。この例は多かった。携帯メールの影響であろうか^{注4)}。

※ 全体で指導する時には、書き手の学習意欲をそがないよう、これとは別の例文を作り行うようにした。

④ 誤字、送り仮名、仮名遣い等

小学校で習得する漢字や仮名の遣い方のまちがいが目立つ。辞書で確かめる習慣がついていない。また、漢字は書けていても、意味を理解していないため、文章の中で適切に使いこなせない。

⑤ 段落意識の欠如

全く段落意識のない学生が数名いた。しかし、指導の効果は早くに現れた。

上記の例は一部の学生に限るとはいうものの、小学校からこれまで看過されてきた事を思うと寒心に堪えないものがある。毎回、添削を繰り返し指導した結果、それなりに注意して書くようになった。指導に手がかかったのは、連綿と続く文であった。

学生の目は、表記に行きがちである。文字の美しさ、誤字や脱字の有無、漢字の使用、それらで文章の良し悪しまでを判断することがあった。しかし、もっとも大事なことは、伝えたい内容が明確であるかという点である。総じて、自分が何に課題をもち、何をどう伝えるかという構想力が不十分である。さらに、表現力の裏付けとなる言語情報を理解する力や、生き方の基盤となる教養や価値観などが問われよう。

3.2 小学校の書く指導の在り方

小学校では、1年生から「先生、あのね」と順序良く書く学習が始まる。中学年では、伝えたい中心をはっきりさせ、段落相互の関係を考えて書く学習を進める。構想指導は、中学年で徹底する。高学年では、自分の考えをしっかりと持たせ、伝え方を工夫させる。このように、小学校での書く指導のポイントは、書く前の構想の立て方にある。「書く前に、どのような準備をするといいのか」と、子どもたちが理解し、実作に生かせることがねらいである。

文章を読み取る学習と違って、情報収集から組み立てに時間をかける学習は、子どもたちに負荷をかけることになる。真っ白な紙に文や文章を生み出さなければならない。そのため、教師には、個に応じた地道な指導が求められる。実際のところ、子どもが進んで書くような教材化の工夫や、構想指導の手立ては、教師に委ねられていたといい。生活作文であっても、書く対象に深くかかわらせ、子どもの感じ方や見方を掘り起こし、深めさせ、的確な言語表現へと昇華させる指導があれば、子どもの文章表現力は確かに豊かなものとなる。同時に、感性や思考力も豊かになる。さらに、指導が他教科の学習や様々な書くことの中で行われて、初めて書く力が身に付くのである。習得した漢字を使っているか、文のねじれはないか、書き言葉と話し言葉を書き分けているか、書くことが整理されているかなどは、国語科だけで完結するものではない。全教育活動、全生活の中で、国語教育を行わなければならない。一方、子どもにとっては、書く学習は、地味で、根気を要するだけに、書き上げた喜びが大きい。作品やノートは、学習の歩みの記録である。それにしても、子どもの書く力は、教師の熱意や力量によって差が出やすい。

平成17年度以降の教科書から、書く形式が、実生活に結びつくようなメモ用紙、新聞、パンフレット、帯紙、放送原稿など、以前にも増して多彩なものとなった。他教科の学習や生活に活用できる内容となっている。国語科で学んだ書く基礎技能が他教科や生活の中で生きて働く展開となるよう工夫が見られる。

4 「コミュニケーション能力」向上のために

4.1 欧米に学ぶこと

かつて、アメリカ合衆国の教育事情を視察し、中学生の話す力量に圧倒されたことがあった。あいさつ、学校の案内、受け答え、すべて臨機応変に笑顔で対応する姿は自然なものであった。高校では、「大統領選でどちらの候補に票を投ずるか」と白熱した議論を交わしていた。A 候補、B 候補どちらでもいいのであって、話す前に、推挙する理由を明確にし、論理を組み立て、周到的な準備をしていることは容易に見てとれた。欧米には、「君の考えは、その根拠は」と、小学生から、教科だけでなく生活場面でも求められる風土があるのだろう^{注5)}。

かたや、日本の大学生はどうか。授業で、進んで質問することも活発な話し合いが行われることも少ない。狭い人間関係でのおしゃべりを楽しんでも、相手や目的に応じて真剣に話すことに慣れていない。これが現状である。今の学生以上に、日本人の多くは、そもそも国語科で話し方を学んだ記憶はないのではないかと筆者自身、今もって話すことに憶病である。社会人になってから、話すことを意識したとあっていい。「話すこと・聞くこと」について、小学校の国語科教育では、指導に力が入っていなかった。先の学生のアンケートに現れているように、「そういえばディベートをしたかな」といった程度なのは、至極当然のことである。

具体例で示そう。今の学生が学んだ「聞く・話す」領域についての指導は、当時の教科書を見ても、「読む」領域と「書く」領域の間に、取り立て指導として挿入されている程度である。³⁾ 例えば、中学年で、メモをとって聞いたり、メモをもとに話したりする学習は、日々の学習や生活に発展させる具体性に欠けている。メモの取り方や生かし方の学習としてより具体的に示されるのは、平成 17 年度を待たなければならなかった。聞くことや話すことが総合的な学習の時間などに生かされるような構成へと改善されたのも同時期である。今、高学年の教科書では、放送原稿をもとに放映したり、プレゼンテーションのような学習をしたりするなど、言語表現力を高める様々な工夫が見て取れる。

残念ながら、今の学生は、メモをもとに話すという学習体験一つとっても十分でなかった。新入生に向けてのサークル紹介で、紙に書いた文章をそのまま読みあげる大学生の姿が見られたとしても責められない。彼らは話すことの指導を受けてこなかったのである。

ところで、学生が印象に残ったというディベートについて、当時の 5 年生の教科書での扱いは、わずか 4 ページである⁴⁾。「いなかのおばあちゃんの誕生日に、お祝いの気持ちを手紙で伝えるか、電話で伝えるか、どちらを選ぶか。」という設定で、理由をはっきりさせて意見を述べ合う。どちらがわに説得力があったか、最後に判定までさせている。このような学習は、先に述べたアメリカ大統領選の授業に通ずるものである。理由をもつこと、どう話したら説得できるかと考えて述べること、その学習としてふさわしい教材である。

しかし、アメリカで目にした激しい口調でのやりとりや、ディベートで勝ち負けを決めるような手法は日本になじむであろうか。日本には相手を思いやり、まず、相手の話に耳を傾ける察しの文化がある。ディベートという手法よりも、互いの見方や感じ方を交流し、建設的な姿勢で向かう話し合いの方が受け入れやすいようにも思う。自分の考えとその根拠をしっかり持ったうえで、新たな考え方を探る話し合いがあってもいいと私は思う。

学習指導要領の改訂によって、「国語科の目標」では、「伝え合う力を高める」といった表現になっ

ている。「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする能力」⁵⁾と解説している。「相手の立場を尊重し」という文言は、伝え合うことが単なる情報のやりとりではないことを示していると思われる。「相手の立場を尊重する」とは、「良好な人間関係」を築いていく大前提でもあり、これはコミュニケーションの本質をついていると思われる。言葉だけではなく、相手を受け入れ尊重する態度や表情や仕草までを含めて、小学校から指導の積み重ねが必要である。社会人になってからでは遅すぎる。

4.2 小学校「話す・聞く」指導の在り方

小学校の教室でよく見かけるのは、話の型（話型）の掲示である。「賛成です。反対です。～さんはどう思いますか。つけたします。別の考え方があります。」などと、ペアでの話し合い、グループでの話し合い、生活場面での話し方と、学年の発達段階に応じて、パターン化されている。自分の思いや考えたことが相手によく伝わり、話し合いが円滑に行くようにと用意されたマニュアルである。しかし、これで本当に話す・聞く力が付くものであろうか。我々、大人でも、このような堅苦しい話し合いはしない。筆者自身、不自然さを感じていた。話型にとらわれて、かえって話しにくく感じる子どもがいるのではないかと。

そんな疑念を吹き払う授業に出会ったことがあった。4年生の授業の一場面である。読み取りをめぐって子どもたちは熱く思いを語り合う⁶⁾。

「ぼく、思うんだけど…」 「〇〇さんは、こういうことを言いたいんじゃない。」 「私は、ちょっと違う考え…」 「…じゃないかな。」 「そうだよ。ぼくもそう思うよ。だってさ…。」

子どもらしい言葉があった。誰もが自問自答している。自分と対話し、教材と対話し、友だちの考えに耳を傾け、自分の言葉で語っていた。文章の語句を根拠に読み取りが深まっていく。子どもたち自身が問題を見つけ、その解決に向けて、「Aかな、Bかな、Cという考え方もあるよ」と話し合いに夢中になるような授業がここにはあった。この学級では、他教科や日常生活の中でも同様なやりとりが交わされているのだろう。国語科で学んだ話し方が生活に生きるとは、こういうことである。お仕着せのよそよそしい話型から実りある話し合いは生まれてこない。さらに言えば、「〇〇君の話し方は、よくわかったね。」と、教師は見逃さず、友だちの話し方から学ばせることである。子どもたちは、共に学び合いながら、話し方の力をつけていく。

「読み取り」や「作文」と違って、「話す・聞く」学習についての研究は、歴史が浅いといってもいい。研究会では、「話す・聞く」領域について参会者が少ない。読解の授業に比べると関心が低い。しかし、私たちの日常生活における言語活動のほとんどは、読むことや書くことではなく、話すこと・聞くことである。もっともこの分野の指導を重視しなければならない。PISA 調査でも、計りきれない能力だけに指導がおろそかにならないことを願う。

コミュニケーションについては、発音や発声ばかりでなく、表情や仕草といった非言語の要素が大きくかわる。国際化時代の今、円滑なコミュニケーションを進めるうえで非言語の指導についてもどこでどのように行うか具体化する必要があるだろう。

5 「文章表現力」と「コミュニケーション能力」に共通する能力

小学校において、読む、書く、話す・聞くといったそれぞれの活動の表れに目を奪われると、それ

らに共通する能力を見落とすことがある。国語科教育において、例えば、中学年であれば、伝えたい中心をおさえ、内容を組み立てることが言語表現の中核となる。したがって文章表現では、書く前の構想指導がポイントとなる。同様に、音声表現でも、話す前に伝えることを明確にし、組み立てることがポイントとなる。高学年であれば、自分の考えをより確かにするために、根拠や理由をしっかりとたせること、伝え方を工夫することなどが指導の中心となる。これは、書くことにも話すことにも共通する能力である。

例えば、児童委員会で決まったことを羅列的に報告していたとしたら、報告すべき一番大切なことを先に述べること、次にその理由を述べるなど話す前に整理しておくこと、そうすると聞いている人は分かりやすいとその場で指導すべきだろう。報告の文章が要領を得ない時も同様な指導が必要である。言語表現力が生活の場で生きる指導という意味で「国語教育」は、全教育活動を通じて、適宜、行うことが望ましい。

日々の授業では、子どもたちが「話さずにはいられない、書かずにはいられない」という状況を作ることである。子どもが問題や疑問をもち、対話を繰り返しながら積極的に解明していく授業では、活発な言語活動を通して、想像力も思考力も身に付いていく。教師も子どもと一緒に驚き、時には、立ち止まり、共に追究し感動する。先に、4年生の国語の授業の読み取り場面を紹介したように、国語の文学教材の読み取りでしばしばそういう場면을教師は用意した。解釈をめぐって根拠をはっきりさせながら話し合い、書きとり、読みを深めていった子どもたち。言語表現力は、まちがいなく育っていたように思う。子どもの気付きや問題意識を大切に、追究の楽しさを味わわせるような授業は、人とかわり、社会とかわりながら生きていくうえでの姿勢を培うものである。「読解指導に片寄り過ぎていた」という声に押される余り、旧来の伝統的な国語授業の良さまでを否定してはいけないと考える。

おわりに

本学の短大生は、保育所や幼稚園実習を通して、言語表現力が明らかに向上するという。実習で、話さざるを得ない状況や、コミュニケーションを取らざるを得ない立場に置かれた結果、現場で指導を受けたからであろう。ささやかであっても言語表現の手応えは、達成感となり、大きな自信につながるものである。

国語科教育では、言語能力が生活や社会で生きて働くことを意図した授業としては甘かったのではないか。教師主導の一斉指導で進む講義型の授業からは、真の国語力は身に付かない。中学校や高校で、生徒自身が立ち止まり、自問し、書きとめ、考える間はあったのだろうか。対話や話し合いは行われていたのだろうか。実生活に結び付く、言語表現力は育っていたのだろうか。せめて、大学の授業では、基礎基本の力を確かにするとともに、学生の問題意識を掘り起こし、活発な言語活動が行われるよう工夫したい。

徐々に、小学校や中学校では、表現力の裏付けに欠かせない読書の取組が根付いてきた。社会とつながりを持ち問題発見につながる総合的な学習の時間が充実してきた。自分の考えをもち、的確に言語表現することが求められてきた。また、実際の新聞を学習に取り入れ、話す・聞く力や文章表現力を高めること、それらの学習の過程で思考力や判断力などを育てることに力を入れてきている。¹²⁾

遅ればせながら、大学教育活動のすべてで、言語表現力を育てる取組が必要と考える。まずは、筆者自身が授業改善に取り組まなければいけないと感じているところである。

さて、本稿は、小学校国語教育の課題について輪郭をなぞったに過ぎないものである。学生の言語表現の実態といいながら、データの量も分析もはなはだ不十分である。「文章表現力」や「コミュニケーション能力」についての言及も浅い。今後、機会を見て考察を深めたいと思う。

注

- 1) 戦後の教育史で「受験戦争、詰め込み批判」から、「個性・ゆとり重視」に転換したのは、84年～87年の臨時教育審議会の答申による。PISAの結果が公表されたのが2001年、完全学校週5日制実施、学習内容の大幅削減が2002年である。ゆとりの本格実施とともに、学力低下の不安が顕在化したのである。まさに、現大学生は、「ゆとり教育」で育った「ゆとり世代」である。
(以上は、『産経新聞』「公教育を問う」第5部 国語力の課題 2008.6.30 7.1 7.2 7.3 7.4 を参照した。)
- 2) PISA (Programme for International Student Assessment) とは、OECD 経済協力開発機構が2000年度から始めた三年に一度の15歳対象の国際学力調査。ここで注目したいのは、「読解力」が単なる読み取りにとどまらないで自分の考えをまとめること、解釈まで求め、表現させていることである。これは、今日の国際社会が様々な新たな問題を抱え、解決する力を求めているからであろう。
- 3) 集計後、数名の学生が、「書く」ことを「文章表現」ではなく、字を書くことととらえ、「好き」と答えていたことが明らかになった。実際には、「好き」が集計結果より少なくなると思われる。何れにしても「好き」か「嫌いか」という問い方が適切なのか、要検討である。
- 4) NHK 追跡! AtoZ 2010.1.30 番組で言語力向上の問題を取り上げていた。その中で、文章力の低下の原因として、脈絡なく言葉を続けていく携帯メールの影響を指摘していた。
- 5) 文部省教員海外派遣団員として1988.年10月にアメリカ合衆国の教育事情を視察する。NHK 追跡! AtoZ 2010.1.30 番組では、自分の言葉で表現するドイツの小学校の授業を紹介していた。
- 6) 平成23年度の国語教科書では、各出版社とも、教材に新聞記事を取り上げているようである。いわゆるNIE (Newspaper in Education) 教育に新聞をとという活動が広がっている。

文献

- 1) 井上一郎他編：小学校学習指導要領解説 国語 :2 東京 文部科学省 2008
- 2) 村上慎一：「なぜ国語を学ぶのか」：76 岩波ジュニア新書 2001
- 3) 木下順二他：国語 教育出版 2000
- 4) 木下順二他：国語 5年上 :36 教育出版 2000
- 5) 井上一郎他編：小学校学習指導要領解説 国語 :9 東京 文部科学省 2008
- 6) 五十嵐雅彦監：研究集録「いなづみ」：22 - 28 札幌市立稲積小学校 4年 国語「想像を広げて やい とかげ」指導者 西村裕子 1995

Problem of Elementary School National Language Education

—From Student's Power of Expression of the Language—

SAKAMOTO Yoshiaki

Abstract : It becomes a current problem that the ability of linguistic expression has been decreased among young people who grew up during the time of more relaxed education policy. In this research paper, existing problems of national language education in elementary schools which those people have received were investigated by way of placing the importance on the perspective of the "expressional ability of writing" and the "communication ability" that can be seen from the actual situation of the ability of linguistic expression among the students in college classes. As a result, it became apparent that they have not learned the basic comprehension or skills that can actively function in their lives and have poor sense of purpose or person-to-person consciousness. It is the necessity or the intention of expression that promotes linguistic activities. The ability of linguistic expression becomes a reliable capability only when people feel the achievement that they could express what they wanted to express in a proper manner. Therefore, there are two important and expected points in national language education in elementary schools. One is to make them possess the ability of linguistic expression which can be effectively applied in their lives and the society, and the other is to let them experience the accumulative study with independence and creativeness for lively linguistic activities.